

2013. 6. 10

No.177



編集・発行人 樋口みな子

E-mail
minakoginga@gmail.com
(連絡用)
URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>
郵便振替「銀河通信」
02740-7-56535

歩いて、読んで、見て、書いた、 銀河通信が25周年に！



6.6 山仲間と駒ヶ岳に登る

北海道は新緑が美しい初夏を迎えました。先日、久しぶりに野幌森林公園を歩いてみると、遅咲きの桜が満開でした。足元には春の花、オオバナノエンレイソウが清楚に咲いていました。

3月、4月と私と同世代の友人たちが亡くなりました。生前にそんなにたくさんのことを話した訳でもないのに、何故かここにいない人たちとふっと語り合いたくることがあります。長田弘さんの著書「なつかしい時間」に「ここにいない人へ問いかけるのは、そうすることで、自分を励ます。自分が励まされる、ということのためです。」という言葉に出会いました。「死んだ人間は、誰もが『一冊の本』をのこして死んでゆく。それが書かれた本であろうと、書かれなかった本であろうとにかかわらずです。死者と語らうというのは、死者ののこしていったその本を、一人読むことだと思ふ」に深く感じ入りました。2年前に亡くなった父の存在も、むしろ今のほうが生き生きと思い出すのですから不思議です。本が好きで、若いときには同人誌に小説も書いていたようです。残っていないのがとても残念です。父の姿はないのに、励まされて書いているような気がします。

家族の身近な話題を書くことから始まった「銀河通信」が7月10日で25周年になります。

タイトルに入れた「歩く」。山にはなかなか登る機会が少なくなりましたが、身近な自然に触れるだけでも、心豊かな気持ちになれます。

私の自然好きと、自然保護運動に関わるようになったのは、故郷の原風景があるからだと思います。日高の山奥、平取の番外地で生まれました。私が生まれた当初、電気が十分でなく、よく停電してランプを使用したという話に「まるで探検生活のよう」とワクワクして聞いたものです。「北の国から」の世界が本当にあったのです。また、5歳ぐらいの時、中学生の叔母と日高の山奥の学校に一緒に行ったことがありました。授業中、私

は机の下に隠れていたのですが真っ赤なカリンズ（赤すぐり）が教壇めがけてパッと転がって教室中が笑いの渦になっ



5.16 小樽赤岩の胎内から見る日本海

たことが目に鮮やかに残っています。父は福島の人でした。父と青函連絡船で旅するのも大好きでした。

好奇心が旺盛で、今も新しいことに挑戦したり、出会ったりするのが大好きです。面白がってくれる読者がいたからこそ継続できた銀河通信です。8月10日に実行委員の皆さんが手作りの祝う会を開いてくださいます。是非いらしてください。



撮影・今田美知子さん
6.7 道南の海向山から見る恵山

小樽赤岩胎内巡り～赤岩山 (371m)



5月16日、久しぶりに晴れ上がり、山仲間と小樽赤岩の胎内巡りと赤岩岳に登りました。小樽水族館9:45出発。1時間程度で赤岩山に着きます。1面の写真は赤岩の胎内の中に潜り込んで、望んだ日本海です。登山道にはカタクリが満開でした。

スリル満点のロープや鉄梯子を頼りに急斜面を降りていくと、ぽっかり穴が開いた胎内に。石仏が海の安全を祈っていました。

足ならし登山でしたが、真っ白い積丹岳と余別岳（右写真）が美しい。海を眺めているだけで、安らぎました。

道南の駒ヶ岳（1.118m）と 海向山（570m）

6月6～7日、山仲間10人で、車2台で便乗しあって大谷地を6:30に出発。高速を利用し駒ヶ岳6号目の駐車場に到着。10:30登山を開始。



6.6 大沼から見る駒ヶ岳

雲ひとつない素晴らしい天気。この優美な山は、これまで激しい噴火を繰り返してきた活火山で1998年から長い間、入山禁止になっていました。我が家では登山をしない夫も息子も登っています。何としても機会があったら登りたいと願っていましたが、ようやく念願が叶いました。山道のどこからでも眼下に大沼や小沼をはっきりと見通すことができ、眺めは抜群。馬ノ背地点(902m)まで（その先は立入禁止）はあっと

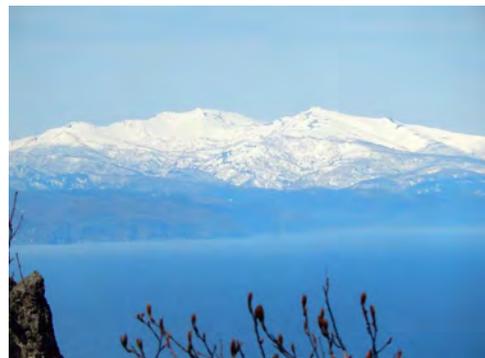


6.6 鋭く屹立した剣ヶ峰

いう間です。写真を撮ったり、休憩したりで11:45到着。

下山後、大沼公園を観光。ビューポイントでの撮影（上写真）は、譲り合って。アオダモの花が涼しげでした。絶景を眺め

今年は冬山にも登っていないし、しばらくぶりの楽しい登山でした。帰り、森の中からキョーン、キョーンと大きな鳴き声。声のする方を探すとクマガウでした。野幌森林公園で



もなかなか見かけないのでラッキーでした。

ウルシに気をつけながら、同じ道をたどり下山は14時でした。

南樽市場で、夕飯の買い物もし夕方には自宅に到着。体を動かすと体調も良くなりますね。

るように、石碑「千の風になって」があります。作詞した新井満さんがこの近くにお住まいで、大沼の風景からこの詩が生まれたそうです。



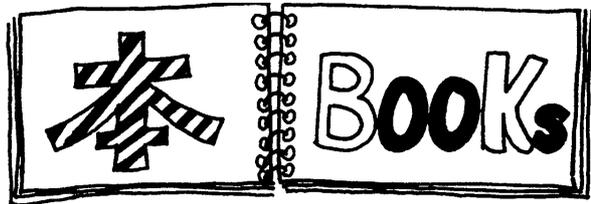
泊まった戸井コテージも素敵でした。

7日は海向山（570m）登山。（下左写真）地元の人以外には、あまり知られていない山です。気持ちのいい林の中を歩きます。釣鐘状の可憐な鈴なりの赤い花はサラサドウダンツツジです。（下右写真）

私たちは分岐から右回りで登り、左回りで下山。噴煙を上げる恵山が目前に見えて壮観。（1面の写真）穏やかな山容の海向山と対照的です。

7:00に出発し10:15に下山。ガゴメ昆布ラーメンを食べて、ひたすら長い高速を走り帰宅。運転されたHさん、Sさんありがとうございました。





たたかう地理学

小野有五著 古今書店 3200円+税

北大に赴任されてから25年間、大学と社会を結んでこられた小野有五さん。2011.3.11の東日本大震災と福島原発事故の一週間後の小野

さんの退官記念最終講義には400人を超える市民がクラーク会館に集まり、たたかう科学者として、関わった市民運動の活動を紹介しました。会場を埋めた市民から万雷の拍手を受けた光景を昨日のこのように思い出します。私も市民運動の仲間として、退官記念集会の実行委員に加えていただきました。

小野さんは90年にゴルフ場造成計画があった根室で現地調査をしたとき、シマフクロウに見つめられたのが、生態系の環境保護に本格的にとりくむきっかけになったと書いています。

私は「森と川を語る会」や「知里幸恵記念館建設運動」「高山植物盗掘防止ネットワーク」などで20数年のおつきあいになります。現在、小野さんは「泊原発の廃炉をめざす会」の共同代表であり、大学は変わりましたが、今も教育に関わっています。

本書は千歳川放水路問題やアイヌ語地名併記運動、3.11後の泊原発の廃炉を求める提訴など、「大学と社会を結ぶ」地理学を標榜してきた小野さんの今までの集大成であり、平易な文章が心に届きます。専門は自然地理学・第四紀学・環境科学ですが、専門外とされる分野でも、関わりとなると、とことん勉強されていて、超人的な活躍に驚かされます。

小野さんの魅力は市民の目線で考え、行動する姿勢です。千歳川放水路問題では、10年の歳月をかけて何度も現地に出向き、検証し、計画を中止に迫り込みました。どの活動も10年は続けています。目先のことしかやらない風潮の中で、大学の教授がここまでやるのかと、市民運動の仲間は大きな信頼を寄せています。私は何人もの人から「北海道に小野先生がいらしてくれて良かった」と聞きました。

3.11の原発事故の直後から、研究者仲間や識者、原子力資料情報室などから情報を集めていたことを知ったのも驚きでした。一番本当のことを知っている人たちから、正しい情報を集め、確かめることの大事さは、今回の原発事故で、いやというほど思い知らされました。

本書は、歩く、むすぶ、教える、演じる（自分の全てを投じて、科学者として演じるということ）、変える、訴える、imagineの7章で、重層的に、行動する科学者としての小野さんの歩みを浮き彫りにしています。人間として、黙っていることはできないと立ち上がる小野さんの姿に、私もまだやれることはあるのだと励まされました。

脱原発から、その先へ ドイツの市民エネルギー革命

今泉みね子著 岩波書店
2100円+税



3.11後にいち早く、脱原発へと舵を切ったドイツから、エネルギー政策の転換を実現するためのさまざまな具体例を紹介したのが本書です。

日本では、「フランスから原発電力を輸入している」「再生可能エネルギーの普及で電気代が高騰して国民が反発している」などと信じている人も多い。著者はそれらのひとつひとつに反論。エネルギー転換への道を苦闘しながらも進み続けるドイツのいまを、詳細にレポートしています。著者はドイツ、フライブルグに住む、フリーの環境ジャーナリストです。

全17基のうち8基の原発を停止しても、2012年のドイツの電力輸出は過去最高で、真冬の電力危機にあったフランスに大量の電力を輸出していたということです。再生可能エネルギーの普及を支援する賦課金は、一時的に電気代を値上げさせているが、長期的にはエネルギー自給による経済効果の方がはるかに大きく合理的だとも述べています。

脱原発のトップランナーとも言われるドイツですが、いきなり脱原発が実現したわけではありません。廃棄物対策や温暖化対策などの環境保護を積み重ねてきたこと。緑の党や、環境保護の市民運動が活発であったことが背景にあります。今泉さんはあとがきに「転換政策以前から、市民、農家、自治体が地道に風力、太陽光、バイオガス発電などを実現させてきたことが実を結びつつある」と語り、「現政府が自らエネルギー転換を政策に掲げたことで、再生可能エネルギー利用が、これまでのマイナーな存在から、いわば国策として認められたといえる」と述べています。

市民運動って、すぐには芽を出さないとしてもその蓄積は大きいなあと感動しました。

今泉さんはこうも書きます。「再生可能エネルギー100%をめざす自治体、バイオマスやバイオガスで電力供給する村、エコ電力を提供する数々の電力供給会社、再生可能エネルギーに投資する市民、省エネ住宅やビルを実現させる建築家、再生可能エネルギー電力をガスに変える技術を開発する科学者など、数えきれないほどの素晴らしい事例がある」と述べ「民主主義の国では政治的な意思は市民が決定するのですから、問われるのは、最終的には市民の意思です。どのような社会に住みたいのか、子や孫の世代にどのような地球を残したいのか。ただ『原発は怖いからいや』と拒否するだけでは足りず、それに代わる方法を自らも積極的に提言したり。望ましい対策を支持したり、自らも省エネや再生可能エネルギー利用に参加することが必要なのだと思います。」と述べています。

私たちはドイツに学び行動するときですね。



ラブレター

いわさきちひろ著 講談社 1500円+税

いわさきちひろの子どもを描いた絵

は、今も多くの人に愛されています。

本書は”ちひろ”の生きる姿勢と、絵画に対する想い、家族への愛情がふんだんに綴られています。

彼女は「大人というものはどんなに苦勞が多くても自分のほうから人を愛していける人間になることなんだと思います。」という言葉を残しました。最初の不幸な結婚を経て、再婚した夫の松本善明さんへのひたむきな愛を貫いた”ちひろ”を知りました。「30年来私はこんなに人を愛したことはないもの。年齢は問題ではない」「私は彼をどんなにつよくだきしめたって足りない程、胸のときどきするようなしあわせな興奮でみちています」と情熱的な言葉が並びます。彼女が年上であったために家族の反対にもあいながら、一途な愛を貫いた人でした。一方で、司法試験をめざす夫と幼い息子のために、必死に働き、自分の絵をだめにしてしまったと嘆くことばに、生活の厳しさが伝わってきます。

また、絵本作家の地位が低かった時代、さしえということばを失くしてしまいたいと、原画を全部取り戻しました。ちひろ美術館に行けば、いつでも見ることができるのは嬉しいことです。先日、北海道近代美術館での「いわさきちひろ展」でたくさんの原画を見る機会があり、その豊かな表現に心揺さぶられました。

平和に対する強い思いをこうも語っています。「希望を何もかもうち砕いてしまう戦争体験があったことが、私の生き方を大きく方向づけているんだと思います。平和で、豊かで、美しく、可愛いものがほんとうに好きで、そういうものをこわしていこうとする力に限りない憤りを感じます」。私の好きな絵本に「戦火のなかの子どもたち」があります。ベトナム戦争の厳しい時代を生き抜く子どもたちの可愛らしさが逆に哀しさを表現していました。可愛いもの、美しいものが大好きだった”ちひろ”は、それらを奪うことに強く抗議されたのだと思います。

創作に苦悩する、若き日の自画像は、可愛らしい子どもの絵とはまるで違って胸を衝かれました。

ちひろ美術館の副館長である松本由理子さんの解説には「子どもや小鳥、草花に注がれた”ちひろ”のまなざしに、これから花開く小さな命への限りない愛を感じ取るからでしょうか。人を愛せなかった苦しさ、愛したがゆえの苦しさ喜びを経て、自分のほうから人を愛していくことの大切さを知ったちひろだからこそ、生み出せた世界なのかもしれません」。と書いています。

1974年、”ちひろ”は55歳で原発性肝がんのために亡くなりました。子どもが大好きだった”ちひろ”が、福島の中の状況を知ったら、子どもの命を守ってと訴えたのではないのでしょうか？

愛らしい子どもを描き続けた”ちひろ”からは想像もつかない、苦難を乗り越えてきた強さを知り、絵を見る目が変わりました。文章も率直で飾らず、人柄が伝わります。

なつかしい時間

長田 弘著 岩波新書 800円+税



詩人である著者がNHKテレビ「視点・論点」で17年にわたって語ったものをまとめたのが本書です。

『なつかしい時間』はこの国では大切にされてこなかった、しかし未来に向かって決して失われていってはいけない、誰にも見えているが、誰も見ていない、感受性の問題をめぐるものです。（あとがきから）

『受信力の回復を』には、発信する言葉は容易に手に入るけれど、他者の言葉をきちんと受信しきちんと受け止めているだろうか？と今の風潮に警鐘を鳴らすのです。『死者と語らう』では、ここにいない人に問いかけ、語らう場所と時間を持つことが、文化の基幹を作ってきたと著者は言います。私も今はいない人たちと語りたくなることがあります。父であったり、友人であったり。生きているときには、むしろ思い出さなかったのに私がこうして本を読んだり、書いていたりしていると、父も本が好きでよく文章を書いていた姿が蘇ります。信心深くはない私ですが、心のなかで支えになっているのを感じます。『大切な風景』の項では「たとえ自分ではそうと思っていなくともじつは風景のなかで感じ、思い、考えるということが、わたしたちの日々の生き方の姿勢をつくっています。風景のなかに、自覚的に自分を置いてみる。すると、さまざまなものがよく見えてくるあるいは違って見えてくる。」とあります。

著者は言葉、風景、本、場、そして人など、日常的にそこにあるのに、私たちが見なくなってしまうものについて語っています。亡くなった妻に語る「五十年目のラブレター」が胸に沁みしました。聞き上手だった妻が芥川龍之介の「蜜柑」を著者が読んで聴かせると「いい物語ね」と言ったエピソード。私も高校時代に読んでとても好きな作品でしたので、思いがけなく出会えて嬉しかったです。著者の詩の一節を紹介します。

「汽車の窓から、半身を乗りだした少女が、腕を勢いよく、左右に振って、蜜柑を、五つ六つほど、暮れなすむ空に、投げ上げたのである。・・・蜜柑は、空に舞って、瞬く間もなく、後ろへ飛び去った。起きたことは、ただそれだけである。が不思議に朗らかな心持が、昂然と、湧き上がってきたのである。その汽車に乗っていたのは芥川龍之介だった。・・・夕暮れのうつくしい季節が巡ってくると、芥川龍之介の夕暮れのことばを思いだす。ずっと、空を見上げていたくなる。・・・鮮やかな色の蜜柑が、ばらばらと、希望のように心の上に落ちてくるまで。」

3,11後の未来に向けて、失ってはならない大切なものは何かと著者は問いかけます。



烈風のレクイエム

熊谷達也著 新潮社 1800円＋税

港町・函館を襲った災禍は1934年の函館大火、1945年の函館空襲、1954年の青函連絡船洞爺丸遭難事故。その記録を元に、3度の悲劇を体験した泊敬介の半生を描いたのが本書です。

著者は宮城県に在住し、3.11の大震災を体験しています。大きな被害をこうむった気仙沼は、教師時代を過ごした土地だそうです。

大火に、戦火に、そして自然の猛威にさらされながら、なお生き延びようとする「土地と人間」をテーマに、主人公や家族、海で働く仲間たちが、時代の惨禍に立ち向かい、たくさんの死と直面しながらも、乗り越えていきます。

自分のことだけで精一杯なはずなのに、主人公がどんな逆境にも負けない逞しさで、見知らぬ女性と子どもを命がけで救う場面は、東日本大震災の時もこんな場面がきっとたくさんあったに違いないと、思わずその渦中に自分も立ち会っているような感覚を味わいました。

自然と共に生きる人々を、多く描いてきた著者です。自然はときに私たちに牙を剥くことを知っているつもりでも、体験者でなくては分からない自然の猛威。海に生きる人は覚悟を決めて生きているのかもしれない。東日本大震災の被災者への思いと重ねて描いていて、追体験したような気持ちがしました。

函館でたった20年間の間に大きな災害があったことも初めて知りました。膨大な資料を読み込んで書き上げた本書の自然描写は、まるで映像のように迫り圧巻。

レクイエムは三陸の海に終わります。

ラジオのこちら側で

ピーター・バラカン著 岩波新書
760円＋税

イギリス・ロンドン生まれのピーター

さんが1974年、日本にやってきてから今日までの仕事とラジオとのかかわり、音楽とのかかわりを語り下ろしたのが本書です。

著者は小学生の頃から、ラジオで音楽に親しみました。中学生の時にはボブ・ディランの歌に衝撃を受け「音楽をきっかけとして社会のことを知った」と語ります。私もボブ・ディランを聴いた世代です。

音楽の世界で生きたいと、東京の音楽出版社に応募し来日しました。その後はフリーになり、ラジオの音楽番組を担当します。こだわりの選曲で、世界中のあまり知られていないけれど、主張のある楽曲を多数紹介しました。

マーケットやメディアの激変の波を受けながらも、己のポリシーを貫いて今にいたるまでの、ちょっとしたドラマとエピソード、その時々流れた・流した音楽について綴ったエッセイです。

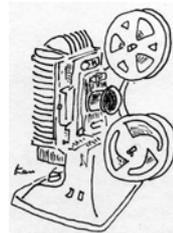
今も、レギュラー番組はラジオ4本にテレビが3本も持っているそうですから、ピーターさんの選曲した音楽に耳を傾けてはいかがでしょうか？

イラク戦争の時には、プロテスト・ソングを多くかけたエピソードも紹介しています。

ピーター・バラカンが選ぶ時代を動かしたプロテスト・ソング50曲も収録しています。

今年のGWは天候が悪く、全く野山歩きができませんでした。この時とばかりに、映画をたくさん観ました。

最近では江別のワーナーマイカルでも、いい映画が上映されるようになったのは嬉しいですね。おかげで邦画にも親しむようになりました。



舟を編む

石井裕也監督

三浦しをんの原作の映画化。

「辞書は、無限



に広がる言葉の大海原を渡る舟である」。この言葉を胸に、15年の歳月をかけて「大渡海」を編む編集者の人間模様が描かれます。

玄武書房に勤務する馬締光也（松田龍平）は職場の営業部では変人扱いされていたが、言葉に対する並外れた感性を見込まれ辞書編集部配属される。新しい辞書「大渡海」の編さんに従事するのは、現代語に強いチャラ男・西岡正志（オダギリジョー）など個性の強い人ばかり。仲間と共に20数万語に及ぶ言葉の海と格闘するある日、馬締は下宿の大家の孫娘・林香具矢（宮崎あおい）に一目ぼれし……。主人公の馬締（松田龍平）と香具矢（宮崎あおい）の恋の行方をのぞいては、ドラマを牽引するような起伏に富んだアクシデントはほぼなにも起こらない。

地道な編集作業が、定点観測のように描かれます。しかし、その膨大な用例採集、見出し語の選定、語釈をめぐる果てのない議論は、時に白熱し時にはユーモラスでさえあり、辞書作りへの根気と情熱が、心に響きます。ことばをたくさん知っているはずなのに、香具矢に上手く言葉を伝えられない。言葉によって絆が紡がれることを知る姿も描かれ、生きた辞書の意味について考えさせます。簡潔で抑制した、語り口もとても良かったです。

茫漠とした松田龍平が、巧まざる笑いを醸し出してアクションスター？のイメージを覆すものでした。現代離れした、馬締の個性が今の時代、とても貴重に思えました。辞書作りの舞台裏を知る楽しさも味わいました。原作も映画もGood! です。

天使の分け前

英・仏・ベルギー・イ
ケン・ローチ監督



スコット
ランドのグ
ラスゴーに
住むロビー
は100万
人を越えた
若年失業者
のひとり。
恋人は妊娠
中で、不良

から喧嘩を売られた暴力沙汰の末、300時間の社会奉仕活動に仕方なく従事することに。奉仕活動の現場で年輩のハリーと出会う、生き方を変えようとして。スコッチウイスキーのテイティングの天分を知ったロビーが、人生の大逆転を賭けて社会奉仕活動の仲間と北ハイランドの蒸留所に出掛けて行きます。

オークションで価格が高騰するスコッチウイスキーが物語のカギを握ります。天使の分け前を逆手に取った仕掛けは、一樽100万ポンド（約1億4000万円）以上で落札される幻のシングルモルトをありがたがる人々に対する痛烈な皮肉になっていて、さすがにケン・ローチです。「天使の分け前」とは、ウイスキーを樽で熟成させる際、1年に2%ほど蒸発して目減りする分のこと。ロビーはその「分け前」を利用して大金を稼ぐ大勝負に出ます。

庶民に手が届かない高級ウイスキーと、働きたくても仕事がない若者。天と地の格差の中で願った「天使の分け前」分だけの幸せ。

これまでのつらい境遇に訣別して新たな人生に踏み出すロビーの姿に、思わず心の中で拍手していました。シリアスなテーマを心温まるコメディに仕立て、若者にケン・ローチはエールを送ります。

リンカーン

アメリカ スティーブン・スピ
ルバーグ監督



1865年、リンカーンが大統領に再選されて2ヵ月後。奴隷解放の賛否をめぐる起きた南北戦争は4年目に入り、多くの若者が死亡します。リンカーンは、奴隷解放を実現させるために合衆国憲法13条を議会で

可決させようと、説得や交渉を水面下で進めます。3分の2以上の確保は難航します。公人として、家庭人として、父親として苦悩するリンカーンを描いています。

僅差で勝利するまでの議会シーンは息詰まるほどの緊迫感がありました。人類史に残る奴隷解放の実現の一瞬を、私も共有できたような感動を味わいました。

今まさに日本では憲法96条を改正しようとしています。3分の2から2分の1にするというのですから許せません。天声人語にも「憲法とは政治権力が勝手にしないように国民の側から縛っておく約束事だ。それを

都合よく変えやすくしようとするのは、憲法の存在理由そのものへの挑戦であり、立憲主義の破壊だ」とあり、私も同感です。

議会のかけ引きの一方で、家族を戦場に出さないようにできるはずという妻の強情ぶりになすすべがない。「僕をなぜ北軍戦士として戦場に出さないのか」という長男との論争も描かれます。

南部の代表団に「もう血を流すのはやめよう」と平和の呼びかけが胸を打ちます。

容姿や、しぐさ、話し方も研究し、リンカーンを演じきったダニエル・デイ=ルイスが凄い。

カルテット！人生のオペラハウス

イギリス ダスティン・ホフマン監督

イギリスの美しい田園地帯にある音楽家のための老人ホームが舞台。ホームの存続のために復活コンサートに挑む姿を描きます。

オペラ界の大スター



だったジーン（マギー・スミス）が入居してきますが、かつての夫だったレジー（トム・コートネイ）とは別れた時のきまづいままでした。

華やかだったジーンが幾度も結婚にも敗れ、人生の変転を経験した悲しみが、老いを深くしていました。かつての仲間と再会し、カルテットを復活させます。老いても音楽を通して、喜びを見出していくホームの人たちが輝いています。

仲間たちが、あの手この手で、レジーとジーンの間柄を修復させていきます。ユーモアもたっぷり。こんな老人ホームなら入ってみたいと思わせます。名曲に乗せて綴られる笑いと涙の人生賛歌に、心もほっこりします。音楽の力ってすごいですね。そうそうたる演奏家と歌手のOBが参加していたことが分かるエンドロール。とりわけ劇中の写真と現役時代の写真を並べた画面の演出が素晴らしい。イギリスの音楽史を見る思いがしました。

じんじん

山田大樹監督



「絵本の里」として知られる北海道の剣淵町を舞台に、人の優しさ

の絆を描いた物語。

3月の試写会を観る機会がありました。企画・主演は大地康雄です。絵本で町づくりを進める剣淵では農作業などの合間に、町民が読み聞かせを担います。

大道芸人の銀三郎は、離婚以来、娘とは絶縁状態でした。絵本の里での出会いを通して、親子の愛情が描かれます。高校生の娘のために絵本を制作する場面が印象に残りました。ドリアン助川の原案に、動物絵本で知られるあべ弘士が絵をつけたオリジナル作品だそうです。

いわさきちひろ ～27歳の旅立ち～

海南 友子監督



1974年に55歳で死去してからも、絵本画家として人気が高いいわさきちひろの生涯を描いたドキュメンタリー。

そのやさしい絵からは想像もできない厳しい人生を送った”ちひろ”は、現代の絵本作家の地位確立のためにも、自分が盾となって働いた人でした。夫である松本善明さん、息子の松本猛さんを含む19人によるインタビューと、そのときそのときに彼女が生み出した作品を紹介しながら、”ちひろ”の人生を明らかにしていきます。

当時、絵本画家の待遇は低いものでした。自分が心血をそそいで描いた絵が、出版社で大切に扱われていないことを知り、絵本画家の権利を守るために働きます。画家の権利を認めない大手出版社と戦って仕事は減り、家計は苦しくなりますが、彼女は負けませんでした。「作品は、画家のものである」と訴え、やがて夫も巻き込み、多くの画家も彼女の働きを認めていくようになります。そして全部の原画を出版社から取り戻します。今も”ちひろ”の絵を見るのが出来るのは本当に幸せです。

晩年、にじみの技法を用いて描いた絵本が注目されました。輪郭を描かない描き方は水墨画に通じるもので、この「にじみ」は見る人の想像力を駆り立てました。その後”ちひろ”はこの技法で描き続け新しい扉を開きました。

ベトナム戦争では、小さな息子の姿を見ながら「こんなかわいい子どもたちを傷つけてはいけない」と子どもたちを守りました。「戦火の子どもたち」は私の好きな絵本です。

意に沿わない結婚をしたこと。自ら命を絶った最初の夫のことなどが語り手によって明らかにされます。自分の意思を貫き通す芯の強さを持った女性でした。家族を愛し、何より、反戦・平和への思いを表現し続けた”ちひろ”。安易に憲法を改正しようとする人々にこそ、この映画を観ていただきたい。人の言葉に傷つき、いつもぐらぐら揺れている私。強い意志の人”ちひろ”から勇気をもらいました。

今年の日本映画復興賞に選ばれました。



6.6道南・大沼公園の
アオダモ



6.1 野幌森林公園の
オオバナノエンレイソウ

子どもたちの未来のために今 できること

6.3 広河隆一さんのお話を聞いて



広河隆一さんはフォトジャーナリストであり DAYS JAPANの編集長です。たくさんの著書も出されていますが、チェルノブイリに今まで50回も

行き、被ばくした子どもたちを長い間見てきて、その惨状を伝えてきました。

6月3日の講演会で広河さんは、3.11後、日本は変わっただろうか？と問いかけました。これだけの事故に遭いながら、私たちは危機感を持ったのだろうか？一番危機感を持ったのは原発関連者だったのではないかと。チェルノブイリでは550～600の村が消えた。当時40代から50代の人たちがほとんど亡くなったと語りました。

私たちは福島の人々の、放射能の中にいる状況を想像する力が必要ではないかと。

広河さんは、沖縄の久米島に、保養所を作りました。3階建ての建物を改修して、50人が宿泊できる施設です。広河さんは「心のリラックスと新鮮な食べ物が免疫力を高める。子どもたちが心身ともに開放され、楽しむことが大事だとチェルノブイリで学んだ」と語ります。久米島では、「安心して自然と触れ合い、元気を取り戻して、福島に帰って行く」と言いました。

この会を主催したのは「福島の子どもたちを守る会・北海道」です。北海道でも保養センターの設立をめざしています。福島から自主避難してきた人たち。福島にとどまらざる得なかった人たちの見えざる壁も大きな問題です。

ジャーナリズムの在り方についても鋭い指摘をされました。「ジャーナリストとは、人々の知る権利のためにある」「人々の命のために働く者だ」と。真実を伝えなければジャーナリストとは言えないと静かな口調に力をこめました。

人の命が大事にされない社会に怒り、広河さんは「被ばくしている子どもたちを放ってはおけない。今できることをしなければとの思いです」と保養所設立の動機を語りました。

私は、そこまで切迫感を持っていただろうかと恥ずかしくなりました。福島の人たちは、今後の原発がどうなるのかと切実な思いで見守っています。

北海道は安心、安全な食糧基地としても大事な土地です。連日の講演会続きで疲れていましたが大事なことに気づかせていただいたお話でした。

海と一緒に広がって いった詩子さん



撮影・小野有五さん

詩人であり、絵本屋「ぼこペン」の店主でもあった飛島詩子さんが4月18日に亡くなりました。がんを告知されてからわずか4ヶ月。延命治療は受けずに、自宅で最期まで過ごされたそうです。

どんなに痛かったでしょう。それでも自分らしさを貫いた生涯でした。

5月26日に親しい友人たちが集まり、詩子さんを偲ぶ会が長沼でありました。私は残念ながら参加できませんでしたが、偲ぶ会のしおりを頂きました。詩子さんのこんな詩が残されています。「野花のように だれにもほめられることも求めず ただただおのずの魂のまま 野花のように 生きる そんな野花の姉妹の一人であるあなたに」

私もそのように生きたいと願ってきたので、何か通じ合うものを感じました。

詩子さんは、利尻島で生まれ育ち、海から生き方を学んだ人でした。自伝的な小説「海へ」の一説には、「海はわたしを支えもしないし、つかまるところさえない。たよりになるのは、わたし自身だ。」ときっぱりと書いています。

昨年9月、お元気に道庁前抗議行動で、原発の廃炉を訴えた力強い声が今も聞こえるようです。

今年は何人もの友人を亡くしました。華美なことはいっさいせず、詩子さんが育てた庭の花と家族だけで見送ったそうです。子どもたちに、平和で安心できる世の中にしたいという、詩子さんの願いを引き継ぎたいと思います。



夫が5月12日に還暦を迎えました。定年まで後少し。天文少年だった夫は、大きな天体望遠鏡を買って(中古)家の前で、街角天文教室を開いて子どもや大人に見せたいと夢を描いています。届いたら、是非我が家に星を見にいらしてください。

吉岡しげ美 セタコンサート Romantic Again～ふたたび～



金子みすゞ、与謝野晶子、茨木のり子などの詩や短歌、「万葉集」「枕草子」「百人一首」に作曲し、国内外でピアノの弾き語りを続けている吉岡しげ美。昨年、音楽詩の活動3

5周年を終え、気持ちも新たにのぞむ恒例「セタコンサート」。

「振りむけば、いくつもの生命が私に別れを告げた・・・でも、愛は輝き続ける。満天の星となって・・・だから、Romantic Again～ふたたび～」

吉岡のピアノ弾き語りによる詩や短歌が、誰の心にもあるRomanticを呼び覚まします。

サクソ、フルート、ギター、チェロ、そして、二胡のコラボレーションと共にお楽しみください。

日 時：7月1日(月) 開場18:00 開演19:30

会 場：スイートベイジル STB139

入場料：5,000(税込/全席自由)

予約TEL03-5276-9388

FAX 03-3991-7973

出 演

ピアノ弾き語り・作曲：吉岡しげ美

サクソ・フルート：加塩人嗣

ギター：辻 邦博

チェロ：永山利彦

二胡：高山賢人

吉岡さんとは札幌で知里幸恵を歌ったコンサート以来のおつきあいです。是非、関東にお住まいの方はお出かけください。

177号は少し早くから準備を始めましたが、反原発関係の行事が連日のようにあり、なかなか思うように進みませんでした。実行委員会作成の銀河通信25周年を祝う会の案内を同封しました。ご都合がつく方はご参加いただくと嬉しいです。(み)

購読料をありがとうございます(敬称略)

2013.4.13~5.22

神原照子(登別市) 和田マサコ(豊浦町)
金尾誠一(富山市) カンパ含む 富田素實江(札幌市) カンパ 鎌田直子(市川市) カンパ含む 中川路朋子(江別市) カンパ含む 中川充(札幌市) 久野真紀子(様似町) カンパ含む 高橋宜也(札幌市) カンパ含む 小野有五(札幌市) 著書「たたかう地理学」
計28000円と切手は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。